

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

## 主 論 文 の 要 旨

論文題目

日本のフランス文学受容に言語教材と修道士が果たした役割—1890年代から1920年代を中心に—

氏 名

中村能盛

## 論 文 内 容 の 要 旨

『比較文学辞典』の「フランス文学と日本」の項目には、第2期の1893年から1904年の教育・研究機関に関する動向として、現在の東京大学文学部にエミール・エックが初代教官として着任し仏文学研究室が設置されたこと、同大教養学部の前身である旧制・第一高等学校にドイツ語とフランス語を主として学習するコースが開設されたことが記載されている。文学受容に関しては上田敏の象徴詩と永井荷風によるゾラの翻訳が行われた時期であったが、エミール・エックと東大仏文学研究室に関する研究業績は数少ない状況にある。

従って本博士論文では、エミール・エックの教育について研究を行うこととし、併せて、その背景を確かめるため、マリア会によるフランス国内での国語教育、そして暁星学園が刊行したフランス語教科書なども研究対象として考察を行った。

第1章では19世紀のフランス本国における初等教育段階のフランス語教育を調査したところ、政教分離を定めたフェリー法の制定によって、フランス語教科書の紙面にキリスト教に関する語句やセンテンスが掲載されなくなり、フランス文学の初歩を学習させるようになったことがわかった。上述のフェリー法が原因で、19世紀前半からフランス国内で学校教育を行っていたカトリック修道会マリア会は、宣教活動と教育活動の場所をフランスからイタリア、スペイン、東洋諸国に移したことが確認できた。

第2章では、1888年に来日したマリア会の神父および修道士がマリア会日本支部を設置し、暁星学園を開学した経緯に関する詳細と、学校誌や関係者からの証言を手がかりとして開学から戦後間もない頃までの暁星学園のフランス語教育の実態を解明した。併せて1895年から刊行が開始されたフランス語の文法教科書の紙面構成の傾向を把握し、文法教科書の上級編である *Cours supérieur* の紙面にフランス文学作品が掲載された事情について考察した。

第3章では、フランス語講読教科書が刊行されることになった事情、ならびに紙面

の特徴を分析した結果、講読教科書の紙面にはマリア会の思想が反映されていること、戦前までは暁星学園だけではなく国内の数多くの教育機関でこれらの教科書が使用されていたことから、日本にマリア会の教育理念を教え説こうという意図がこれらの教科書に込められていたことを解き明かした。

第4章では暁星学園のフランス語教師を務めながら、東大仏文学研究室の初代主任教官を担当したエミール・エックのフランス文学とフランス文学史の講義内容の解明を行った結果、ジョゼフ・ヴェルニエが執筆した講読教科書の *Cours supérieur* の文学史とエミール・エックの文学史の間に多くの共通項を見出すことができた。そしてエミール・エックは、フランス文学の講義の中で門下生にカトリック系作家を紹介し、キリスト教の思想を教え説こうとしていたことが明らかになった。実際、門下生たちはエミール・エックが称賛する伝統主義的ナショナリズムと新古典主義に偏った研究を行っていた。しかし辰野隆が東大仏文学研究室の主任教官となってからは、中世から20世紀までの作家の研究が偏りなく行われるようになり、エミール・エックの門下生の1人である太宰施門が京都大学を退官したことに伴い、伝統主義と新古典主義に関する研究は消滅した。

以上、本博士論文では、マリア会と暁星学園が刊行してきた教科書等を媒介として、比較文学事典に掲載されている「フランス文学と日本」の第2期および第3期の項目を言語教育の観点から分析したところ、マリア会の修道士が、東大仏文学研究室においてはフランス文学講義を通して、そして東大以外の旧制高校や大学などにおいては暁星学園が刊行したフランス語教科書を通して、伝統主義的ナショナリズム、そしてキリスト教ならびにマリア会の教育理念を広めようとしたことを、新たな知見として見出すことができた。